

# とある泊地の性事情

hentai提督

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

絶倫な提督が泊地の艦娘達とひたすらえろいことをする頭の悪いお話。

下品でドスケベな女の子って……良いよね……。

他小説一覧は←

[https://syosetu.org/?model=user\\_novel\\_list&uid=305724](https://syosetu.org/?model=user_novel_list&uid=305724)

# 目次

第1話	初期艦大井	1
ボツ話 (旧2話)	鹿島着任①	10
ボツ話 (旧3話)	鹿島着任②	23
第2話 (新)	鹿島	35
第3話 (新)	長波	43
第4話	蒼龍・飛龍	52
第5話	春風	60



# 第1話 初期艦大井

「……毎度毎度、朝から元氣よね、ほんとに」

呑気に寢息を立てているここのトップの布団に潜り込み、股間に顔をうずめて、目の前でそそり立っている怒張に軽くデコピンを喰らわす。

もう慣れたとはいえ、この男の節操のなさには呆れるばかりだった。

まだ外は微かに明るいくらいで、早起きの艦娘以外は大方寢静まっている時間帯。

そんな時分に、私は今日一日、秘書官としての責務を果たすために、スケベの権化の寢所にまで気配を殺してやってきていた。

秘書官の業務に己の性処理を加える（無理強いはしない）とか、よくもまあ後ろから刺されずにやれてるもんだと、この変態の肝の座り様には感心する。今更も良い所だが。

「ひどいにおい、ちゃんとシャワー浴びてるんでしようね……」

まあ、表面上は嫌がりながらも秘書官担当の日を待ちわび、こっそりと胸を躍らせ、しとどに股を濡らしながら雄の匂いで頭を惚けさせている自分も大概なのだろう。

……いや待て、そんなことはない。私は断じてコイツみたいな変態ではない。

悪いのは全部この猿だ。年中盛りっぱなしのこんな発情期野郎をほったらかしにしていては北上さんの危険が危ない。

「すう……はあっ……んっ……♡」

だからそう、これは必要不可欠な行為なのだ。至って普通で自然なことだ。

さつきから提督の匂いを嗅ぎながらぐしゃぐしゃの下着ごしに秘所をまさぐるのをやめられないのだって全部何もかもこいつが悪い。

私は悪くない。Not guilty.

「ふっ……んっ……起きないんなら、勝手に始めるわよ」

散々やることやってきた癖に、いちいち理由をこじつけないといけない自分をめんどくさい女だと再確認しながら、提督の下着を慣れた手つきで脱がす。

先程よりも一層濃くなった雄の性臭が布団で覆われた空間に充満し、蒸し暑さによる発汗も相まって私のお腹の奥をきゆうきゆうと疼かせる。

「なによ、こんなに涎たらして……そんなに私の口が待ちきれなかったの？」

びくびくと震えながら鈴口からカウパーをこぼす肉茎がとても愛らしい。自分だけじゃなくて提督も期待してくれていたのだと勝手に解釈し、思わず頬が緩む。我ながらチヨロい女だ。いつから私はこんな男に惚れ込んでしまったのだろう。

割かし最初の方からだつたよね大井っち、とか北上さんにしよっちゆう言われたりもするがそんなはずはない。いやほんとだから。嘘じゃないから。だから姉さん達も木曾もそんな目で見ないでください死んでしまいます。

「はあ……んっ……ぐ……♡」

口をめいっばい開けて、提督の男性器を一気に喉奥まで咥え込む。最初は舐めるのさえ億劫だったのに、今ではえずきもしない。

それどころか、提督が口の中いっばいな多幸福感に酔いしれながら、舌で満遍なくねぶりまわし、ひどい音を立てながら引っこ抜き、上顎にカ리를擦り付けては快感に浸り、喉の奥まで飲み込みながら、一心不乱にしゃぶり続けてしまう。

「んぶっ…ぐぶっ…(ぼっ…♡)」

呼吸も出来ないほど深く深く提督を迎え入れ、その息苦しささえも愛おしく、鼻を抜ける性臭に頭の中まで犯されながら、もっともっと気持ちよくなってもらえるようにご奉仕する。

(早く……早く出して。じゃないと私……先に……♡)

己の分身を震えさせ、身震いしながらもまだ達しそうにない提督にじれったさを感じながら、もはや下着としての機能を果たしていない布切れをずらし、秘部を強く擦り上げる。

イラマチオでさえ絶頂を得られるようになってしまった私には、奉仕による充足感と息苦しき、提督の匂い、さらには女性器と陰核から来る至上の快樂に脳天を突き上げられる。

(だめっ……もういつちゃ……つくう……！)

どうせ達するなら提督と一緒に。

そう願つて事に及ぶが、まあ上手くいかない。

大抵こうして私が先にいつてしまうか、イカされるかの二択だ。

毎度熱が冷めた後は情けないやら悔しいやら嬉し恥ずかしいやらで散々悪態をついてやるのだが、幸い意中の男は夢の中だ。

この男に躡け尽くされた心と身体は、私の反発心など意にも介さず、この天上の快樂を一寸たりとも逃さず味わいつくそうとする。

「んんっ……ぐ……ふーっ……♡ ふーっ……♡」

きつと、今の私は酷い姿をしているだろう。

ふやけきつて焦点の定まらない目、だらしなく伸びた鼻の下、絶頂していようが構わず提督を放さない口と舌、品無く股を開き、小刻みに震え続ける腰と尻、とめどなく溢れる愛液と、音を立てて吹き出す潮――。

おおよそ年頃の女がしていい筈もない痴態を曝け出して、それでも提督が喜んでくれ



るから、文句を言いつつ淫猥極まりない行為も衣服も道具も全て受け入れてしまう。

(ほんと、都合のいい女)

こうなる以前、提督と出会う前の私が見たら何と言うだろうか。

絶句か、罵倒か、卒倒でもするか、下手すりや自分もろとも魚雷で木っ端微塵か。

でも――

(こんなに幸せで気持ち良いの……やめられる訳ないでしょ……♡)

もう無理だ。この沼からは逃げられない。

この男に愛してもらえない未来なんて、想像するだけで気をやってしまいそうだ。

常に死と隣り合わせの戦場に身を置き続け、極限状態を維持し続けるには、人の心を

持った私達艦娘では到底耐え切れるものではない。

そもそもが兵器なのだから、心など不要どころではないのだが、なんの因果かそれを

捨てるができない。

精神は肉体に引つ張られるというが、果たしてその通りであり、所詮は年端もいかな

い小娘に過ぎないのが私達艦娘だ。

今までに何人も、いや何体も、壊れて使い物にならなくなったモノを見てきた。

以前の私もそうだった。さっさと死ぬるものならどれだけ救われるか。地獄はあの

世にあるんじゃない。この世そのものが地獄だった。

そんな折、到底戦力として計上できなくなつた私はこの泊地とは名ばかりだつた地に配属された。しかも、何をトチ狂つたか初期艦として。

所詮は使い捨ての間引き用だつたらう。彼だつて、提督と言えば聞こえはいいが、実際はただの口減らし。提督をやつていけるだろ、う資質を僅かに認められただけだ。

それくらいに日本、ひいては世界は追い詰められていた。

まあそこで自棄になつて色々あつて暴れて爛れてたら吹雪とか叢雲とか漣とか電とか五月雨とか白雪が来てそこからこの泊地は大きなつていつ——

「ぐぼお!!」

—— つくううう!!? ♡

「がぼっ!!? ぐうっ! んぶううっ ♡」

こ……この鬼畜……急に頭掴んで腰振つてえ……。

少しぐらい手加減しなさいよ……こんなのもたすぐ……。

「おぼっ! ♡ ひぐっ ♡ つぐうううっ!!? ♡」

私が達したと同時に、提督が思いつきり力を込めて喉の奥深くまで押し入つてくる。

そして全身を震わせ、大量の精子を私の胃に流し込んできた。

「ぐっ!!? ぐえっ! ♡ つっつ!!? ♡」

普通なら嘔吐か、下手すりや窒息死レベルで酷いことをされている筈なのに、私の全

身は歓喜に震え、絶頂を繰り返し、注ぎ込まれる精液をひたすらに飲み干していく。

窒息寸前の思考はただただ快楽に溺れ、この雄に使われる喜びを更に深く覚え込まされながら、私は必死に提督にすがりついていた。

「朝から死ぬかと思つたわ。もう少し加減しなさいよ。私じやなきや氣をやつてるわよ」

漸く治まつた射精の後、散々好き放題してくれたお札に腰が抜けるまで吸い尽くしてやつた私は、足元で伸びているうちのトップを見下ろしながら文句を垂れている。股からも垂らしてる。つてやかましいわ。

ていうか本気で死にかけて。遠慮がないにもほどがないかこの猿。

まあものの数分もすれば復活するので放つておいても全く問題ない。この絶倫め。だがそこもかつこいい。

情事の際は基本負けっぱなしな分、せめて平時くらいは手綱を握つてやらないと気が済まない。むしろ普段は大体頼りにならないから、しつかり面倒を見てないとこの泊地はやつていけなかつたりする。まあ、そこも可愛いんだけど。

……うん、ほんと病気だわ。治す気もないが。

「こら、せっかくスツキリさせてあげたんだから、しやきつとしなさい。一緒にシャワー浴びましょ。その後朝ご飯作ってあげるから」

ほら復活した。そんなに目をきらきらさせて、いい年して子どもなんだから。

……一発くらいで満足する玉じゃないのは知ってるけど。

「だめ。もう時間ないんだから。いい加減にしないと怒るわよ」

まるで捨てられた子犬みたいな目をする提督に、抱き着きつきたい衝動をなんとか飲み込む。

時間も結構押しているし、これ以上は業務に支障をきたす。

この人が私達の提督でいてくれるのは、上にとって判り易い戦果を挙げ続けているからなのだから。

ここは我慢だ、鋼の心で。でないと私も堪え切れなくなる。

「——お仕事頑張ったら、夜、いっぱい相手してあげるから」

ついでにキスをして、耳元でそっと囁いてやる。

少し体を震わせた提督はようやくと観念したのか、私の髪をそつと撫でてシャワー室に向かつて行った。

案外広い背中を見つめながら、冷蔵庫に何があるだろうと思ひ浮かべつつ、この幸福

な一時を胸に刻み込む。

「早く夜になると良いわね、提督」

## ボツ話（旧2話） 鹿島着任①

「それで？ ご主人様の朝の一番搾りは美味しかったですか初期艦様？」

「それはもう」

「おおえろいえろい。漣は妬いてしまいますぞ〜！」

「仕事しないんなら出て行ってくれない？ いつものことだけど」

「そんなご無体な。漣にはここ以外に行く宛てもないというのに」

よよよ、とわかりきった演技をする漣に一瞥もくれず、私は吹雪・叢雲・白雪とともに業務を片付けていく。

「うるさいのでさっさと出て行ってほしいのです」

「ぶらずまちゃん、いくらヤニ不足だからってそれは酷いですぞ〜」

「失せろ」

「おおこわ。ま、嗜好品はどうしてもね〜。くれるだけマシってもんかね」

「アル中共がやさぐれているのです。嘆かわしいのです」

「今日のおまいうスレはここですか？」

「よし表出ろ。吹雪ちゃん、演習申請よろしくなのです」

「あ？」

「じゃあ叢雲ちゃん」

「あんたねえ、余分な資材なんて——」

「白雪ちゃん」

「聞きなさいよ！」

「……」

「無視は流石の電も傷つくのです」

「それ以上傷が増えたところで変わりやしないよー」

「尻の穴をもう一つこさえてほしいのかなのです五月雨ちゃん？」

「大井さーん、良いですかー？」

「燃料弾薬は2割まで。それ以上使ったら秘書官枠から外す」

「ペナルティきつすぎい！」

「気を付けるのです」

「わかりましたー」

わいのわいのとやかましいのが出て行って、漸く執務室が静かになる。

普段通り目付きの悪い吹雪。未だにツツコミ癖が抜けない半分は優しさでできてい

そんな叢雲。ただ黙々と業務をこなす白雪に、相変わらず仲が良いな、などと能天気なことを考えているであろうハンコ押し機の提督。

私が秘書官の時は大体こんな感じだ。他の艦娘が秘書官であれば、それぞれの親しい者を集めて業務をこなす。

何分うちのお飾り提督が基本的に役に立たないので、秘書官のみだと業務が回らずこういう形になっている。まあ、白雪や鳳翔さん、妙高さんなんかは一人でも回せるだろうが。

「やっぱり白雪がいてくれると助かるわ。仕事が早いなんの」

「ありがとうございます」

「流星は主計学校出。私もアンタくらいできたら楽なのよね」

「ありがとうございます」

「白雪、もう少し返事の仕方を工夫しなさい」

「……努力します」

吹雪の指摘に、ほんの少しだけ感情を見せる白雪。

相も変わらず不器用な姉妹だ。叢雲と顔を合わせ、小さく苦笑する。まあ、これでも大分マシになったのだから、ゆっくりで良い。今はまだ、それが許される。



そうこうして業務を片付けていると、ふと叢雲が口を開いた。

「そういえば、今日着任する艦娘がいなかったっけ？」

「いるわよ。たしか——」

「新横須賀海軍本部より出向、香取型練習巡洋艦二番艦鹿島。本日ヒトサンマルマル着任予定」

「白雪」

「……です」

「まあまあ。それにしたって、練習巡洋艦ねえ。うちに来る必要あるのかしらね？」

「上層部の方々にも色々とお考えがあるんでしょ。うちはいつも通りにやれば良いわ」

「ま、そうなんだけど。なーんか勘ぐつちやうのよね、本部付きがわざわざこんな僻地に飛ばされるなんて」

「案外、ハマやらかしたただけかも知れないわよ」

「それはそれはご愁傷様」

軽口を叩きながら、叢雲の考えには私も思うところがある。

ここは通称リサイクル泊地、以前は廃棄物処分場。かつての私のように、PTSDやら重度の損傷で回復の見込みがないやら、艦娘になったはいいものカタログスペックを發揮できないやらで戦力として数えられなくなった艦娘が送られてくる場所だ。

そんな問題児揃いの艦娘を率いて戦ってきたのが、そこで呑気に欠伸をしているうちの提督。運が良かっただけと言えば確かにそうかもしれないが、凄いなだか凄くないんだか良くわからない男だ。

「ま、資料を見た感じ随分と優秀じゃない？ エリートコースまっしぐらって感じ」

「だーかーらー余計に気になるんでしようが。まあ確かに？ 最近はそこまで重症の子が来ることも少なくなっただし、新米の子らを指導できる艦がいれば、それはそれで助かるだろうけど」

「上がうちのことをそこまで考えているとも思えません」

「吹雪の言う通りね。やつぱりなんかやらかしたんでしょ。上官のセクハラに耐えかねてブツ飛ばしちゃった、とかね」

「そりゃ良いわ。ほんとにそんな理由なら仲良くやっていけるもの」

「うちにも魚雷の的にされかねない男がいるものね？」

4人で視線を向けてやれば、両手を挙げて全面降伏状態の提督が冷や汗を垂らしていた。

「ハイ」が……」

私、香取型練習巡洋艦二番艦鹿島は、今日この泊地に配属となった。

いつ空中分解するかもしれないオンボロ飛行機で何度も給油を重ね、わざわざこんな僻地まで送ってくれた老齢のパイロットに礼を述べ、どうか無事な帰投をと祈っておい

た。  
少し前までは、あんな紙飛行機同然の代物でこんな所まで単機で飛ぼうなんざ正気の沙汰ではなかった。

が、いろんな噂に事欠かないこの泊地の活躍で、ここいら一帯の海域及び空域は比較的安定しており、本国のシーレーン確保に貢献大ということで、さらに雑多な噂が飛び交うようになっていた。

曰く、あの泊地は深海棲艦と同盟を結んでいるのだの、放り込まれる艦娘を共食いさせて能力を強化させているのだの、泊地の提督がとんでも超人で深海棲艦共をばったばったと薙ぎ倒しているのだの、拳句の果てには噂の提督と、その、アレな関係を結べば艦娘がなんかすつごい強くなる（語彙力）だの *etc etc* …。

まあ酷いものだ。そんな噂話に花を咲かせられるくらいには、日本も多少はマシな状況になったのだと喜ぶべきか、地方やこういつた僻地で日々懸命に暮らす人々を忍んで憂うべきなのか。

なにはともあれ、なぜ本部付きだった私が横須賀からこんな南東の僻地に飛ばされた理由は……、うん、まあ、今は思い出したくない。

聞くも涙、語るも涙な美談であれば良かったのだが、実際はくっしょいもない内容だ。あれだけ邁進していた輝かしい私はもう過去の遺物でしかない。あ、また泣きそう。

「ヒトフタサンマル。……はあ、行くか」

ここで黄昏でも仕方ない。

こうなつてしまった以上はもうどうしようもないし、何より、不思議とそこまで後悔はしていない。

対深海棲艦の最前線であるこの泊地に配属ということは、イコール死だ。

なにやら妙な噂の絶えない場所だが、戦力は他の最前線組に負けず劣らずで、今の日本本土が東の間の平和を装っていられるのも、この泊地による部分も大なり小なり。

さて、進んだ先には蛇でも出るやら。

パンパンに膨れ上がったボストンバックを担ぎ上げ、特注サイズのキャリーケースを引きずりながら、私は泊地建物内へと歩を進めて行った。

(なにこゝ……蛇つてレベルじゃないわよ……)

守衛を務めていた人影を目にした時から、全身を嫌な汗が纏わりついて気持ち悪い。彼女だけではない。泊地内ですれ違う艦娘達はぱつと見は正常そのものだが、新参者の私を見る目が酷く恐ろしく、まるで海の底から覗き込まれているような錯覚にさえ陥ってしまう。

皆一様に笑顔を浮かべながらも、私を見るときだけは目が笑っていない。

挨拶や会釈を返すのだけで精一杯だった。

(やっぱり後悔した。さっきした。これが、最前線で戦っている艦娘と本土組の違いなのかな……。あ、もうほんとに泣きそう)

「おい、あんた大丈夫か？」

へたり込んでマジ泣きしたいのをどうにかこうにか耐えていると、執務室まで先導を請け負ってくれている先程の守衛、夕雲型駆逐艦四番艦の長波が声をかけてきた。

「あ、その……。本土組は、やっぱり歓迎されてないのかな、って」

「あー……うん、なんつーか。いや、さっきはあたしも悪かったよ。値踏みするようなことしちまってさ。でもまあ、ずっと前線で戦ってればこうもなっちゃう。皆ほんとに良い奴ばっかりなんだぜ」

だから、悪く思わないでやってくれよ、難しいかも shouldn't けどさ。

そう言つてニツと笑うと、それ以降彼女からは恐怖を感じなくなつた。ほつとしたよ  
うな、余計に底の無さを見せつけられたような……。

「ほら、ここにあたしらの提督がいる。中に入つても泣くなよ？」

「な、泣きませんよ」

「へえ、どうだかね。確か今日の秘書官は……おーこわっ」

「え、ちよ、なに——」

「まあ頑張れ、応援してる。せいじゃ、長波様はクールに去るぜ、ってな」  
言うだけ言つて、長波は手をぶらぶらしながら戻つて行つてしまった。

「……え、ええ……」

どうすんのよ。

私の涙腺持たないわよ、これ以上。

(やばい。……ほんとやばい。おうちかえりたい)

執務室に入った途端、正直腰が抜けそうになつた。

なんというかもう、圧が違う。さっきの長波とも、すれ違った艦娘達とも。

「ようこそ、私たちの泊地へ。球磨型四番艦重雷装巡洋艦、大井よ。よろしくね、鹿島さん」

「よ、よろしく願います……」

「あんた大丈夫？ 顔真つ青じゃないの。ああもう吹雪も白雪も、さっきから眼飛ばすのやめなさいったら。あ、私は吹雪型駆逐艦五番艦の叢雲よ」

「吹雪型駆逐艦一番艦吹雪」

「……吹雪型駆逐艦二番艦、白雪。……です」

あ、やっぱり睨まれてたんですね。目だけで殺されるかと思いました。

蛇に睨まれたカエルってこういう気持ちなんだろうなあ。

コワイ。

「それで、こっちの置物がうちのていと——」

「漣！ たつだいま戻りました〜!!」

「うっひいっ!?!」

「お？ ……誰？」

「知らないかんむすなのです」

「——ふーん」

後ろの扉がバァンツ!! と音を立てて開かれ、私は文字通り飛び跳ねてビビった。ほんとにビビった。心臓が口から飛び出た。

さらにオマケで3人の艦娘から特級の殺意を向けられた気がして——あ、これダメだ。

「——っ——! ——! ——!」

「ん……なに……」

耳が拾う妙な物音に、落ちていた意識が覚醒していく。

頭がぼーっとしてはつきりしない、寝起きだからだろうか。

「え……わたし……」

確か執務室に行つて、それで……なに、この匂い……。

「——え?」

ぼやけていた視界が薄つすらと晴れ、耳が先程から拾っていた音の、そして妙な匂いの正体に、私は啞然としていた。

「はあっ♡ やっ♡ もう、ていとく♡ ほんとに……かしまさんが起きちゃ……ん



んっ！♡ この、ばかあ！♡」

暗くていまいち良くわからない。わからないが、でも、これって――

「んむう!?! んっ、ふうっ♡ ヘーとく♡ てーとく♡」

――これって、もしかしなくても、セツ――

「あっ」

あまりのことに気が動転していたのか、身を動かそうとした拍子に、私は寝かされていたであろうソファから転げ落ちてしまった。

当然、派手に音を立ててしまう。

「あ、あのっ、えっと、わたしっ――」

「――ほら、起きちゃったじゃない、あの子」

ようやく目が順応し、より鮮明に眼前の光景が視界に飛び込んでくる。

椅子に座っているのが、たぶんこの提督さんで、そして、一糸まとわぬ姿で彼に跨って、顔だけこちらに向け、声を発した女性が――

「お、大井、さん……う？」

つい先ほど目にした、凜とした佇まいの女性、のはずだ。でも、目の前の彼女が本当に同一人物なのか、それすら判然としない。

目を据わらせ、乱れた髪を、痴態を見られたことを気にするそぶりも見せず、雄にし

がみつぎ、しなだれかかって媚びる——1匹の雌が、私を見つめていた。

## ボツ話（旧3話） 鹿島着任②

「はっ♡ ひっ♡ ていとく♡ まって♡ いまあの子とはな——いいっ!?!♡」

「ふーっ♡ ふーっ♡ ——このへんたい♡ 興奮してるんでしょ?♡ 鹿島さんに見られながらえっちするのが♡」

「ふふっ。大丈夫、怒ってないわ。だって気持ちいいんだもの、しょうがないわよね。だから私も——♡」

「あっは♡ 腰止まんない♡ 鹿島さんにつ♡ 今日会ったばかりの子に見られてるのにつ♡ お尻振るのやめらんないのっ♡♡」

「ぐっひっ!?!♡ あぎっ♡ んおっ!?!♡ だめっ♡ てーとくにっ♡ あかちゃんのへやつぶされちゃうっ♡♡

んぶう!?!♡ はっ♡ はへっ♡ へーとくう♡ おちんちんきもちいい?♡ わたしっ♡ おふっ♡ ちゃんときもちよくできてる?♡ ひいっ♡♡

「あっ♡ もうでるの?♡ いいよ♡ だしてっ♡ なかつ♡ なかにほしいのっ♡ いつでもっ♡ ひっ♡ すきなだけっ♡ ふおっ♡ てーとくせんようだからっ♡

おおいのしきゆうっ ♡ いっぱいにしてえっ ♡ ♡ ♡

「ぐぶっ!?! ♡ あっ ♡ あっ ♡ でへる ♡ わかるの ♡ てーとくのせーし ♡ こんなにたくさん ♡ や、いく ♡ いっちゃ ♡ いくいくいっぐ ♡ ♡ いっ……ふぎいいいっ!?! ♡ ♡ ♡」

「あ……あ……」

身体が金縛りにあつたみたいに動かない。さっぱり頭が働かない。二人から発せられる獣じみた声と、肉と肉がぶつかり合う音、纏わりつく熱気、部屋に充満する饅えた匂いが鼻をつき、頭がくらくらする。

私は一体何を見ているんだろう。あの二人は、いや、あれを人と呼んでいいのだろうか。獣の方がまだ品性がありそうだと思えるくらいに理性の欠片もなく乱れ、絡み合っている。

大井さん。先ほど見た彼女は、幻だったのだろうか。とても同じ女性とは思えない。

それとも、私は今も夢の中でまどろんでいるだけではないのか――

「鹿島さん?」

「ひっ」

いきなり自分に向けられた声に、全身をびくつかせる私。

さつきまで散々に乱れ——いや、狂ったように提督とまぐわっていたとは露程にも思えない、鈴を鳴らしたかのように落ち着いた、大井さんの声だった。

「どうしたの、大丈夫？」

「え、あ、や、……え？」

——どうしてこの人は、こんなにも平然としているのだろう。

生まれたままの姿で、玉のような汗を全身に浮かべ、むせかえるような色香を纏って、艶めかしさすら漂わせる濡れた髪をかきあげ、胸もあそこも隠そうともせず、太ももに提督の、男の人の、その……、精液を垂らして——。

「さつきはびつくりしたわ、急に倒れちゃうんだもの。きっと疲れが溜まっていたのね、よく眠れた？」

「……は、はい。だい、じょうぶ、です……？」

かがんだ大井さんが、へたりこんでいる私の顔を覗き込んで優しく問いかけてくる。どこまでも澄んだ、綺麗な瞳が私をまっすぐ見つめている。

なんなんだろうこれは。なにがどうなってるの。このひとはだれなの。さつきまでのケダモノとはちがういきものなの？

やっぱり、これってたちのわるいただのゆ——

「ああ、ちなみにこれ、夢じゃないわよ」

「——」

「そうだ、せつかくだし聞かせてくれない？ 私と提督のセックス見て、どうだった？

私はね、すつごく興奮したわ。あなたのおかげよ。やっぱり、誰かに見られながら提督に愛してもらえるのって、生きてる実感湧いてくるし、優越感が半端じゃなくて。提督は提督で馬鹿みたいに盛って犯しに来るし、ほんと、あなたにも味わってほし——って聞いている？」

「こんな……こんな……！」

狂ってる。この女も、そこで呑気にふんぞり返っている男も。

「馬鹿にしてるんですか!?! あんな、人前で猿みたいに盛って! 恥ずかしくないの!?

壊れてるっ! あなたも! 提督も! 私は! 横須賀で本部付きだったのに!

「こんな、こんなっ——」

「あ、それなんだけど」

「なによっ!」

「あなたが横須賀で本部付きだったってやつ」

「それがなに!? 私は必死に努力してっ——」

「それ、全部嘘だから」

「毎日毎日——……………は？」

今、この女は何と言った？ 私の経歴が、嘘？ 全部？

「……………頭沸いてるんですか？ オーバーホールをおすすめしますよ」

「あら素敵、沸いてるのは間違つてないわ。さつきなんて沸騰してたし。オーバーホールはごめんだけど」

「ふざけないでよ！ なにを訳のわからないことをつ——」

「うなじ」

「……………はあ？」

「あなたの後頸部、インプラント埋め込まれてるでしょ」

「……………あー、ほんとにおかしいんじゃないですか？ そんなもの生まれてこのかた

——」

馬鹿馬鹿しい。

そんなもの、艦娘になった時にだつて埋め込んだことなんてない。

ない、はずなのに——。

「……………ちよつと、冗談でしょ」

うなじに触れた指先に、明らかに硬質な窪みをなぞる感触があった。

「え、だって、こんなのいつ——」

「ちなみに私にもあるわよ」

あなたのよりだいぶ大きいけどね。

そう言うと、随分と呑気な様子で髪をかき上げ、項部をみせる大井。

見ればそこには、鈍い黒色の窪みが、グロテスクに彼女のうなじに食い込んでいた。

「な、なによ、それ……」

「なにつて、戦災孤児分別用、日本謹製のインプラントよ。私のはだいぶ旧式で、あなたのは、準新型、つてとこかしらね」

「……戦災孤児用？」

「そ。深海棲艦つて、いきなり沸いて出てきたでしょ。ある日突然、世界中に。日本は島国で海洋国家だから、シーレーンがなきゃ生きていけない。なもんで、それはもう一生懸命頑張ったんだけど、当時の兵器じゃ効果薄くてね。W W I の欧州以上の消耗戦でまず男が激減。次に口減らしとして非協力的な国民を老若男女問わず深海棲艦への撒き餌にして時間稼ぎと囷も兼ねて誘導した後諸共総攻撃を加えたんだけど、それでもダメ。追い詰められ日本は、これまたどこから沸いて出たのか知らないけど、自立式人型海洋決戦兵器、今の艦娘の前身技術を得た。当時の政府は、僅かに残っていた人間性も倫理観も全てかなぐり捨てて、形振り構わず人体実験に次ぐ人体実験。最初はここでも



老若男女を問わずだったみたいだけど、結局被験者として都合が良かったのは、当時溢れかえって処分に困っていた戦災孤児達だったわ。今も少なくないらしいけど。まあ、それらに共通して埋め込まれてるのが、この細胞適正識別インプラント。これが付いてると、本土の上の連中なんかは「穴開き」とか呼んでる。ほんと腹立つわよねあいつら」

「……………うそよ、そんなのしらない、おそわつてない…………」

「でしようね。あなた多分、その年になるまで培養プラントで育ってきたんだと思うわ。さつき私が話したことを知らない子は、大体そう。今は細胞適正が高いと、艦娘として固着するまでそうすることが多いらしいわね。よく知らないけど」

「じゃ、じゃあ私の記憶は!? お父さんとお母さんは!? あれだけ毎日頑張ってきたのに! 必死にしがみついていたのにつ!」

「適当に刷り込まれたんでしょ。今の技術は凄いわね、流石は我が祖国だわ、気に入らなけれど。あなた、両親の顔、思い出せる?」

「だ、だって、お父さんもお母さんも、いつも優しくして、私を……………あれ……………なんで……………」

「……………なんでここに左遷になったか、言える?」

「そ、それは、毎日毎日セクハラしてくるクソジジイをブツ飛ばしちやって……………」

「当たり前ね。それ、あなたと似た境遇の子たちも同じ理由だったって言ってるのよ。クツソしようもない理由だわ、ほんと。本土の技術班にDMの変態でもいるのかしら」

「そ、そんな……信じられるわけ……」

「追い打ちかけるようで悪いけど、ここに来た時”後悔”した？」

「……」

「それにね、あなたがほんとに本土組のエリートなら、こんなところ送られるわけないでしょ。しかもあんなオンボロで。あいつらにはね、国が滅茶苦茶金と時間かけてるの。前線に寄越しやいいのに。そういうところは昔つから変わってないわよね、日本人は。極端から極端に振れるとことか」

「わ、わたしのにもつは……しぶつだったら……」

「……酒とたばこ、その他諸々の趣向品だったわ。いつもどおりね。大方、開けると閉められなくなるからとか言われて、開けなかったんでしょ」

「……うそ、そんな……うそよ……」

ばかげてる。こんな与太話、信じる方がどうかしてる。

でも……自分の記憶を信じようとすればするほど、私の中の何かが崩れていくのがわかった。

だって、記憶の中の友人も、恩師も、恋人も、あんなに大好きだった両親でさえ、顔

も名前も思い出せない。

「むちやくちやだ、こんなの。あんまりじゃない。こんな、まるで実験動物みたいに――」

「あ、そつか。わたし……そうなんだ……」

ダメだ。頭では否定したいのに、もう心が認めちやつてる。

「こんなあつさり、簡単に――」

「……」

「鹿島」

「……それ、わたし呼んでます?」

「そうよ。あなたはきつと、艦娘として期待されたほどの性能を認められなかった。だからここに送られた」

「……もうちよつと、ないんですか。欠陥品で不良品とか、笑えませんか」

「でも大丈夫。あなたはこの地獄で生きていくわ。幸せにね」

「なにをどうしたらそんな――」

「だって艦装は送られてくるから装着できるってことでしょ。それなら戦えるし。」

「それにほら、生まれたての赤ん坊のくせに私達のセックス見てパンツ越しに水溜まり作っちゃうくらいだし?」

「……………は？」

言われて足元を見ると、確かに水溜まりが。しかもちよつとねば——

「……………つ!!」

スカートも靴下も濡れるのを気にする余裕もなく、私はそれを覆い隠すために座り込んだ。

火を噴きそうなくらいに顔が熱い。

「そうしてる方が可愛いわよ。男好きする身体してるんだし、良かったわね」

「ふ、ふぎつ! 褒めてない! どこまでばかにっ……………!?!」

身体に柔らかな重みがかかり、私はなにが起きたかとおつきに理解できなかつた。

大井が、私を優しく抱きしめていた。

「な、なにを——」

「大丈夫よ、鹿島。空いた穴は、別の何かで埋めてしまえば良いんだから」

「そんな簡単に……………知った風な口ばかり……………」

「だってここににいる子はみんな、あなたみたいな子しかいないもの。私も、提督もね」

「そんなの——」

「だから……………今、埋めてあげる」

「——え? なっ!?!」

後頸部に違和感を感じた瞬間、空気の抜けるような音が鼓膜を揺すった。

瞬間、大井をつき飛ばそうとするも全く力が入らず、そのまま彼女に身体を預ける形になってしまふ。

「な……………にを……………」

「人間ってね、どんな極限状態でも、三大欲求さえ満たされていればなんとかなるの。

あれ、満たされてたら極限とは言えない？ ……いつか、なんでも。」

大井が私を抱き締めたまま背中をさすり、耳元で抑揚のない声で続ける。

身体が弛緩してしまい、顔も動かさず、大井の表情を伺い知ることはできない。

「さっきあなたに打ったのは、まあ、簡単に言えば媚薬ね。かなり強力で特殊なやつ。趣向品の中に入ってたわよ。これもいつものことだけど」

「ふざ……………けない……………で……………?」

途端、身体が異様に熱を持ち、全身から汗が噴き出して止まらなくなる。

特に熱は下腹部に集中しているようで――

「ひつ……………なに? や、やだ……………んんっ!?!」

次第に強烈な疼きがおなかの奥から溢れ出してきて、私の思考をめちゃくちゃに引つ掻き回す。

「はっ♡ はっ♡ な、なにこれえ♡ おかしい♡ こんなのお♡ んぶうっ!?!」

「んちゅつ ♡ ちゅば ♡ かしま ♡ かしまあ ♡」

「ひやめ ♡ きすう ♡ おんなのこどうしで ♡ こんなあ ♡ つじゆ ♡ あ ♡ うそ ♡  
もういくつ ♡ ひぐうつ ♡」

口の中を大井の舌にめちやくちやにされて、あつという間に達してしまった。

こ、こんなの ♡ 穴埋めるってレベルじゃ…… ♡

そして、もうふらふらで余裕なんて欠片もない私に追い打ちをかけるように、提督さんがばんばんに膨れ上がったおちんちんを目の前に差し出してきました ♡

「はっ ♡ はっ ♡ くさっ ♡ くさいですていとくさん ♡ こんな ♡ こんなのつてえ ♡」

「どう？ ♡ ひどいにおいでしょ？ ♡ これくわえちやつたらもうもどれないわよ ♡」

「そ、そんなことするわけ ♡ あっ ♡ で、でも ♡ おちんちんさんびくびくしてくるし ♡  
そうだし ♡ ちょ、ちよつとだけ ♡ なめるだけだから ♡」

おちんちんの先を一舐めた途端、私は狂ったようにおちんちんにしゃぶりついていました ♡

そのあとのことはさっぱり覚えていませんが、私はみなさんみたいに壊れちゃいました ♡

だから、これからも末永くよろしく願いますね、提督さんっ。

## 第2話（新） 鹿島

「み、みなさん……今日は、んっ♡ よ、よろしくお願いしま……ふう♡」

「うわあ……のっけから気合入ってるわね」

「あ、叢雲さん……業務のお手伝い、あ、ありがとうございますっ♡」

「あーはいはい、どうせ暇だしね。じゃ、ちやちやつと済ませますか」

手をひらひらさせながら、この泊地でも最古参の一人である叢雲さんが答えてくれます。

ていうかこれ、思ったよりやばいかも♡ あいさつもろくにできないですていとくさん♡

「ま、一人で終わらせる量でもないから。どつかの誰かさんのおかげでね」

「あの、ほら！ 司令官はその、マスコットみたいな感じですから！」

「吹雪ちゃんそれ、フオローになってませんよ？」

初期艦の大井さん、次いで配属された吹雪さんに白雪さんが続き、当の提督さんは素知らぬ顔で書類に目を通されています。マイペースな方です、ほんとに……♡

朝からあんなに激しかったのに♡ もうお腹の中いっぱい……たぶたぶしちやつてます♡

「て、提督さん、お茶のおかわり……ひんっ♡ どうしましようかあ?♡ ——熱めですね、はいっ♡」

「ほんと甲斐甲斐しいわねー鹿島は。自分で淹れさせればいいのよ、ハンコ押すくらいしかないんだし」

「そうそう。あとは絶倫なくらいしか能がないんだからこいつは」

「叢雲、そこ一番重要」

「わかる」

「お二人とも、せめて業務中は慎んでください」

「あはは……」

「ご、ごめんなさい白雪さん♡ 秘書官のわたしが一番慎めてませんっ♡

「だけどころな、こんなのお♡ むりい、かしまにはたえられません♡ あそこにまえばりはられちゃって♡ セーしがにげられなくてあばれてて♡ しきゆうがずうつとあつくつて、おもたくつて♡ うずきっぱなしでえ……♡

「で、でもっ。お茶くみぐらいはして、提督さんに良い所を見せないと!♡ ひんっ♡



「やっぱ凄いわねー白雪は。私の何人分こなしてるのよ」

「ふーっ♡ ふーっ♡」

「そんなこと。叢雲ちゃんなら、私なんてすぐに追い越してしまいますよ」

「んっ♡ んんっ♡」

「あんたが言うのと嫌味にしか聞こえないわ……。いくらなんでも異常よ、異常」

「ぐっむう♡」

「私はとつくにあきらめたわよ。書類業務で白雪に勝とうなんて、魚雷なしで戦艦凄姫に突っ込むようなもんだし」

「ごぼっ♡」

「大井さん、前それやって普通に撃退しましたよね」

「ひゅー♡ かひゅー♡」

「そうだっけ？ そんなの一々覚えてらんないわ」

「おうっ♡」

「私なんて同じ状況ならフラタで精一杯なのに……。もっと頑張らなきゃ！」

「んぶうう♡」

「あのね吹雪、あんたのそれも大概だから、絶対おかしいから。どうなってるのよ私の姉は……」

「ふぎっ ♡ ♡ ♡」

「提督？ こっちは業務終わったけど、流石に壊れちゃうわよ、その子」

「っ？ ♡ ♡ ♡」

いきたい ♡ ごめんなさい ♡ いきたい ♡ きつい ♡ くるしい ♡ ゆるして ♡

ていとくさん ♡ ていとくさん ♡ つらい ♡ もうつらいのお ♡ いけないのや

だあ ♡ くるう ♡ ごわれちゃうう ♡

「ほらどいたどいた。ちよ、においすっご ♡ かしま？ 生きて……うわあ ♡ もう

ぐっちやぐちやじゃない ♡」

「鹿島さん、えっちな顔…… ♡」

「…… ♡」

あ ♡ とれた ♡ めかくしやつととれたあ ♡ あ ♡ むらくもさん ♡ ふぶき

さっん ♡ しらゆきひやん ♡ たすけてえ ♡ ていとくさんのおちんちん ♡ に

おいすごいの ♡ つらいよお ♡ しんじやう ♡ もうしんじやう ♡

「あんたね、お茶零したくらいでやりすぎでしょ。その机、鹿島の匂いが染みついてもうとれないわよ？ え？ だからこうした？ そうね、あんたってそういうやつだったわ

よね……」

「それにしたつて鹿島も大概よ。依存しすぎて、提督の命令が軽く洗脳みたいに効いちやうなんて。おかげで朝から今の今まで寸止め地獄なんですよ？　これ」

「大体8時間くらい、でしたっけ。その間ずっと目隠ししてボール啜えて縛られて司令官のおちんちんの匂いを……わ、わたしならほんとに死んじやうかも……」

「いいなあ♡」

「え？」

「え？」

「白雪……業が深いわね……」

「え？　あれ？　そ、そんなにおかしいですか？」

「白雪ちゃん……」

「姉え……」

おねがい♡ たすけて♡ ほんとにもうむり♡ とぶ♡ しぬ♡ おおいさん♡  
かとりねえ♡ あ♡ いぎ♡ あっ？♡ いける♡ いけそう♡ やつと♡ やつと  
いける♡ いく♡ いく♡ ひつぐう……♡ あえ？♡ うそ♡ まつて♡  
まつてえ♡ また♡ またなのお♡ もうやだあ♡ おう♡ もうころしてえ♡ ん  
ぎい♡

「はあ。それじゃ、私たちは一旦宿舎に戻るから。いい加減助けてあげなさい」

「ちやんと私たちの分も残しておきなさいよ。ってまあ、言うだけ無駄よね」

「司令官、新しい下着を工廠で作ってもらったので、楽しみにしててくださいね!」

「白雪たちのこともたくさん可愛がってくださいね、司令官」

や♡ うそ♡ うそうそ♡ まって♡ たすけて♡ たすけてください♡ いかな

いでえ♡ あつ♡ いく♡ いけない♡ いぐつ♡ いけない♡ ていとかさん♡

♡ ていとかさん♡ ♡ ほんとにもう♡ のうみそとけちやいますう♡

「ふぎいつ!!」♡ あぎつ♡ やあ♡ あぐう♡ てっ♡ ていとかさん♡ いてる♡

さつきから♡ ずっといってるんです♡ もう♡ もうじゆうぶん♡ いくのとま

んないの♡ しぬ♡ またしんじやう♡ ゆるして♡ ゆるしてえ♡

ていとかさんひどい♡ ひどいよお♡ やつと許してもらえたと思つたのに♡ こ

んどはずつといきつばなしなの♡ もうつくのやめてえ♡

「あうっ♡ あっ♡ ていとかさん♡ ひっ♡ おちんちんびくびくつて♡ いきそう

?♡ っ♡ おちんちんからせーしでる?♡ かしまでしゃせいしてくれるんで

すか？♡ ひぐっ♡ うれしい♡ だして♡ はあっ♡ かしまをつかって♡ たくさんきもちよくなつてえ♡」

あ、ていとくさんきもちよさそう♡ このかおすき♡ かしまのだいすきなていとくさん♡ かしまをひろつてくれたていとくさん♡ たくさんつかつてくれたていとくさん♡ やさしくて、いっぱいすけてくれて、すてないでくれるていとくさん——

「あ♡ でてる♡ かしまのしきゆうに♡ いっぱい♡ ていとくさんが♡ すきつ♡ ていとくさん♡ だいすき♡ あいしています♡ なんでもします♡ かしまは♡ ていとくさんのためならなんだつてできます♡ すきなときにすきなだけつかつてください♡ だから、だから……鹿島を捨てないでください」

——私、ずるい女だなあ。こんな言い方したら、提督さんが優しくしないはずなのに。

あ、提督さん、抱きしめてくれてる……。キスも、ついはむみたいな優しいキス……。「ありがとうございます。ごめんなさい。こうして愛してもらえるだけで、鹿島は、本当に幸せなんです。たまにでいいから、思い出してくれれば、それで、それだけで、私には十分すぎるんですから——」

好きです。愛しています。この身も心も、魂の一片までも。貴方に捧げて、貴方をお護りします。

「そんな顔しないで、提督さん。私のせいなんですけど、でも、私の為に……嬉しいです。ごめんなさい、嫌な女で」

それでも、貴方は受け入れてくれる。知っています。この泊地のみんなが。貴方がどれだけ多くのものを背負っているかを。堕ちた私達をここに繋ぎとめてくれていることも。貴方の心がいつ壊れても、おかしくないことも――。

「――きて、提督さん。好き sadece、鹿島を使つて？ なんでもしていいんですよ。嫌なことも怖い夢も、なにもかも、今だけは忘れられるように……」

## 第3話（新） 長波

「あーもう、明石は気にしすぎなんだよなあいろいろと」

南洋の暑つ苦しい熱気と、カンカン照りの太陽にほとほとうんざりしながら、あたしは泊地中をふらふらと歩きまわっていた。かれこれ3時間は経つたろうか、全身を汗が纏わりついて気持ち悪いつたらありやしない。

「大体なあ、こんな辺鄙なところで歩哨やる必要なんざどこにあるつてのさ。ここで銀蠅するような物好きがいたら大手を振って歓迎してやるつてもんだ。ようこそここが極楽です、景気づけにこちらの榴弾でもいかがでしょうか？　つてな。……あー、あほらし……あつぢいなあ……風呂入りて……」

暑い。ひたすらに暑い。ついでにかつたるくてつまらんことこの上ない。やつぱ駆逐艦は戦つてなんぼだよ。そりゃ、最近はちよつとやりすぎだったかもしんないけどさあ。フレツチャーとの演習で熱くなりすぎて艦装ダメにしちまったのは、うん、まあ、正直すまんかった。明石にはこっぴどく絞られたよ。オマケにこの歩哨任務だ。どうせ汗かくんなら海で暴れるか提督と一発やるに限る……？

「あん?」

うだる脳みそがロクでもないことしか考えなくなってきた辺りで、あたしは妙なもんを見つけた。なんかやたらとデカい尻が2つ、木から生えてただけど。

「GO!! Iowa, GO!! Just do it!!」↑なんか小声

「Hmm, she, so cute」

「……なあ、なにやってんだあんた、ら——!?!」

見るからに、これぞロクでもありませんのお手本みたいなことをしてる肉2つに話しかけたと思ったら、とんでもない速さで羽交い絞めにされて口も塞がれた。オイオイ、ちつとも動きが見えなかったぞ……。ていうか乳がデカすぎて余計に暑い! 牛か!

「Shhhh! Keep quiet!」

「She, s t r y i n g h a r d r i g h t n o w. D o n ' t d i s t u r b, p l z?」

「(なんか知らんがとりあえず両手挙げて領いとこ)」

何を言ってるのかさっぱりだが、出歯亀なのはなんとなくわかった。ていうか日本語で喋れ、英語は専門外なんだよあたしは。ここは日本、……でもないが、まあ日本ってことでいいだろ、基本あたしらが守ってんだし。

「あー、サラにイントネなんちゃらか、なにやってんだよこんなとこで……」



「いいから声小さく！ あと *intrepid* よ！ *intrepid* ! u got  
it?」 ↑ 凄いい小声で言ってる

「Hi, ナガナミ。ほらこつち、覗いてみて」

「へいへい、どうせ提督が誰かと盛って……ないな」

サラトガにちよいちよいと誘われて覗き込んでみると、何やら提督と……デカい金色の毛虫？ 愛宕か？ いや、この2人がいるってことは……。

「さつき2人でウオーキングしてたんだけどサ」

「このクソ暑い中を？ なんだよ、あたしと代わってくれりや良かったのに」

「? とにかく、そしたら Honey と Iowa が2人つきりなの見つけちゃって！」

「あの子、とつても奥手ですから。こうして陰から応援してるんです」

「That's right!! 私たちは愛のキューピットね！」

「いや、ただの覗きだろそれ……。にしても、あんなに縮こまってちやなあ。戦ってる時とは別人だな、二重人格つてやつか？」

「……そこがかわいいんですよ」

「うん、そうね。Nard な Iowa もステキでしょ？」

「……ふーん。ま、見た目はどう間違つても可愛いつてよりかはべつぴんさんだよな、乳も尻も半端ないし。流石は外人さんだ」

「あら、ナガナミだつて立派なモノ持つてるじゃない!」

「ほんと、とつてもやわらかくて形もキレイ、うらやましいわ」

「だーもう暑いんだからくつつくな! あとアイオワ気付いてるぞ、提督も行っちゃまつてる」

「What?! Oh, shit!! I missed it!!」

「Stay calm, Pid. Lets listen to her.」

気付けば提督は服をぱたぱたしながら建物に向かつてるし、アイオワは顔を真っ赤にしながらかつちにズンズン向かつてきていた。

やっぱなんだかんだで戦艦は迫力あんな。あと乳揺れすぎだろ。巨乳つてレベルじゃねーぞ。

「Sara! Pid! Why are you here!? How long

have you been?!

「You've done, Iowa!! Good job!! Did u kiss

him?」

「kiss?!」

「I'm sure u did. How about that? Sensitiv

「What are you talking about!」

「あー、私は撤回するからなー、熱中症になんなよー」

なにやらきんきん騒いでいる3人組に声だけかけかきといて、提督の後を追う。

女三人寄れば姦しいつてのは万国共通か。生まれが違うつてだけで、結局大して違いはないんだよな。ほんと、複雑だよ——。

……あーもう、暑さで頭がやられちまった。ダメだもやもやする、提督誘つて風呂入ろ。

「で、アイオワとは何喋つてたんだ？ たまたま会つて世間話してただけ？ ふーん、そ

もそもなんであんなとこにいたんだ？ 大井にあんたも他の子も業務中に盛るから邪

魔だつて執務室追い出された？ あつはは！ほんと猿だねえ」

提督を座らせ、頭からぬるま湯をかけてやりながら軽口を叩く。

あー、やつぱ良いな。提督といるとほつとするよ。お互い素っ裸なのがなお良しだ。

「そのくせアイオワには手つけてないんだな。向こうから来るならそうするつて？ そりやまた気の長いことで。でもさ、すっごい身体してんじやんか、アイオワ。やりたく

なんないの？ は？ サラトガとイントレピッドにお願いしてる？ いやはや、流石は長波様の提督だ」

この絶倫女たらしめ。爆発しちまえ。

「あの2人もとびきりエロいもんな。やつぱ骨格からして違うのかね？ それとも遺伝子？ 羨ましいねえ。へ？ 長波のおっぱいも大好き？ 柔らかくて綺麗で最高だつて？ ……嬉しいこと言ってくれんじゃんこの色男♡」

ああもう、そういうところなんだよ、この助兵衛は♡ そんなに好きならいっぱい使つてやるよ♡ ばーか♡

「提督も物好きだよね、こんなガサツなのでも良いなんてさ。ほくら♡ 提督の大好きなおっぱいだぞ♡ んっ♡ ふふっ♡ 提督の背中で乳首つぶれちゃう♡ つふうっ♡」

こんな脂肪の塊のなが良いんだか♡ デカくて邪魔だし、重くて邪魔だし、ちゃん締め付けとかなないと揺れて痛いし。ほんとにあるだけ無駄としか思つてなかつたけど、提督が喜んでくれるから、あつてよかつたよな♡

「どうだー提督？♡ ここが極楽ですよ♡ 特別製の榴弾2発はいかがですか？

♡ はっ♡ んんっ♡ あはっ♡ そんなにきもちいいの？♡ んー？♡ なーに？

♡ もうまぢきれない？♡ しょうがないやつだなーていとくは♡ それじゃあおま

ちかねの……♡」

提督の全身を隅々まで洗ってあげて、残りは痛そうなくらいにばんばんになってるおちんちんだけ♡

「んっしょと♡ ていとくー♡ あいつかわらずデカすぎだつてば♡ せつかくはさんでやったのにさきつぽがでちやつてるじゃんか♡」

あつっ♡ あつつい♡ てーとくのおちんちんやばっ♡ においもきつつい♡

「んっ♡ すう〜……♡ つはあ♡ ていとく♡ このにおいやばいよ♡ のうみそまでおかされちまう♡ ほんつとえぐいよね♡ え、はやくうごかせつて?♡ はいはい♡ ていとくさまのおおせのままにと♡ んべえ〜♡」

すでにあわでぬるつぬるのおっぱいに、よだれもたつぷりたらしから、ゆうっくりしごいてあげる♡ はあくっ♡ これ、やつぱすごいよお♡ ていとくにおっぱいおかされちやつてるう♡

「はっ♡ んひっ♡ ふううっ♡ ど、どう?♡ きもちいい?♡ ながなみのおっぱい♡ ほかのやつにもまけてないだろ?♡ あはっ♡ びくびくつてした♡ おちんちんでこたえないでよ♡ このへんたい♡」

くそっ♡ やっぱりきもちいい♡ ていとくにおっぱいおかされるのきもちいいおずりゆずりゆつておっぱいでこするたんびに♡ はらのおくにきゅんきゅんき

まう♡ ながなみさまがこんなことするなんて♡ ていとくだけなんだからな♡

「んっ♡ へへっ♡ ていとくやらしーかおしてるよ?♡ もういつちやうの?♡ い

いよ♡ だらしないかおしていつちやえ♡ ほら♡ いけっ♡ いっ…:はえっ?

あっ♡ てーとく♡ やらっ♡ ち、ちくび♡ やめっ♡ ちくびいつ♡ あひゆっ♡

そんなひっばっちややらあ♡ のびちやう♡ もうはずかしいくらいおつきくてな

がいのに♡ もつとえっちなちくびになっちやうよお♡」

はっああ♡ やばっ♡ ちやうしのりすぎた♡ ちくび♡ ていとくにさんざんい

じめられて♡ すっごいえっちなかたちのちくびい♡ よわい♡ ほんとによわい

のお♡

「はっひ♡ んぎい♡ つよい♡ ちからつよいよお♡ つぶれる♡ つぶれちや

あっ♡ やっ♡ のぼすのもだめっ♡ さっきだめっていったのにい♡ あいつ♡

やっ♡ にゆうりんこねるのもやらあ♡ ひっいつ♡ わたしのおっばい♡ どうぐ

♡ おちんちんこするどうぐにされちやってる♡ ふぎい♡」

これだめえ♡ ていとくにしっつけられてるっ♡ あ♡ いく♡ これ♡ すぐいく

♡ いっちやうう♡

「ひゅらっっ♡ ていとく♡ はげしい♡ おちんちんつよい♡ ごしごしつよいよお

♡ おっばいっつぶれちやう♡ ていとくのおちんちんでこわされちやうう♡ あっ♡

いくつ♡　いくいくいくつ♡　ふおっ？♡　でてる♡　おっばいにせーし♡　てー  
 とくのせーしおっばいなかだし♡　いっばいでてるうっ♡　いっつつくうっ♡」

「やー、仲良くのぼせちまったな。こりやまたしかられちまうかなあ」

2人で水を飲ませ合いつこしながら、あたしは頬が緩むのを止められないでいた。うんまあ、別に止める必要もないんだけど。

提督は提督で能天気な、大丈夫だろきつと、なんてさっぱり頼りにならないことを言ってくれる。

ま、いいや。提督が私の戦う理由なんだし。提督が良ければそれで、万事世は事も無し。

「なあ提督、またして欲しくなったらいつでも言いなよ。提督と長波様の仲なんだから、遠慮なんてしないでよ？　あ、する訳ないか」

さあて、そろそろ艦装も直ったかな。

あたしももつと強くなるからさ、どーんと構えててくれよ、な、提督。

## 第4話 蒼龍・飛龍

「はあゝ♡ きょうもあつついね、提督♡」

執務室に入った途端、私はいつものように前屈みになりながら、胸元をわざとはだけさせて。パタパタと叩り、ついでの提督も煽ってあげる♡

あは、睨んでる睨んでる♡ 朝はおあずけくらっちゃったもんねー♡

「ごめんね提督、昨日は寝付けなくて寝坊しちゃった♡」

やかましいぞこの駄龍だなんて、ひどいんだー♡

寝付きが悪かったのは本当なのに。今日が楽しみで楽しみで、頭が冴えてどうしよもうもなかったし。

ついでにオナニーも一生懸命我慢したんだよ♡ どつかの誰かさんのせいでもうどうにかなりそうだったけど、頑張って我慢したよ♡ ご褒美にたくさん可愛がってもらわないと♡

「おはよう蒼龍。出てきたんならさっさと仕事してくれる？」

「あ、おはよー飛龍。もー、そんな怖い顔しないでよー」



「うるさい、さっさと働けこの駄肉」

「あ、ひつどい。でもいいもん。提督は私のお肉大好きだもんねー♡」

そういつて、私は提督に向かってギリギリまで短くした袴をぴらぴらと摘まみ上げ、たつぷりと肉のついた太ももと尻を見せびらかす♡ あはっ♡ すっごい怖い目してる♡ 今日ほもうほぼ紐なんだけど、チラ見えしちゃったかなあ？♡

飛龍もここそと横目で見ちゃつてまあ♡ ほんとむつつりなんだから♡ そこが可愛いんだけど♡

「ところで飛龍、朝はちやんと我慢できたのかな？」

「な、なんの話よ」

「だーかーらー、朝から提督見て発情しちやわなかった？ って聞いているの」

「あんたじやないんだから、そんなことするわけないでしょうが！」

「そっかそっか、えらいえらい♡ だって2人で決めたもんね、今日は提督焦らしに焦らして♡ すっごいイライラさせてえ♡ あたまからっぽにしてめっちゃくちやにしてもらおうねー♡」

「ち、ちがつ。わたしは別に、やるなんて一言も……」

「嫌とも言わなかったじゃない。飛龍つたらズルいんだー♡」

「あーもううっさい馬鹿蒼龍！ いいから仕事しろ！」

「はいはい、わかりましたよーだ。提督ー？ 夜までいーっぱい我慢してね？ ♡ ちゃんと頑張れたらー……♡ ごほうびにいっぱいイイコト♡ してあげるからさー♡」

ひたすら媚びて小馬鹿にした声で提督をイラつかせて、親指と人差し指で輪つかをつくってスコスコ♡ ってさせながら舌を突き出してレロレロ♡ 提督これ好きだもんねー♡

あ、あれほんとにやばい♡ 目が据わつちやつてる♡ 今日は何談抜きで殺されちゃうかも♡

「ふっ♡ ふっ♡ て、てーとくう♡ クーラーつけようよお♡ あつくてしんじやうからあ♡」

「……♡ もう汗やばいってば……においも……きつい♡」

あの後、飛龍にひっぱたかれて仕方なく仕事して、その間に胸押し付けたり、耳元で小馬鹿にしながらかえつちなことを囁いたり、両脚開いてもはや紐なアレを見せつけたりと、散々提督を挑発しまくって、今日の業務も大方済んだ頃。

急に提督がクーラー止めちゃった♡ しばらくしたら部屋中が熱気と汗でひどいに

おい♡

「あつつ♡ のどかわいたー♡ ほらひりゅう♡ みずのもお♡ んむう♡」

「んぶつ♡ んぐつ♡ そうりゆ♡ やめへっ♡ んふう♡」

しかも、水は口移し以外禁止とか言い出すなんて♡ ほんつと変態だよ、えつちすぎるよお♡

「あついのにくつつくなあばかそーりゆー♡ もうあせでべとべと♡ きもちわるいい♡」

「だつてーとくのめいれいだもん♡ しょうがないよお♡ ほらあ、ひりゅうもさつさとぬいじやいなよ♡」

「あ、ばかつ、なにかつてに——」

「うっわ♡ みててーとく♡ ひりゅうつてばすつごいすけべなのつけてる♡ やーらしー♡」

「やつ♡ やだっ♡ だめっ♡ みちやだめ♡ みないでいとく♡ そうりゅうもはなしでえ♡」

飛龍が着てたのは、オレンジのすつけすけブラとショーツ♡ しかも、一番大事なところに切り込みが入ってて、乳首とあそこが隠せないドスケベなやつ♡ むつつりにもほどがあるでしょ♡ ひくわー♡

「ほらひりゆう♡ てーとくすごいめしてひりゆうみてるよ?♡ うれしいね♡」

「はっ♡ はっ♡ や、やらあ♡ はずかしいよ♡ しんじやうよお♡」

「ひりゆうってほんとどうしようもないよね♡ きのうだっておなにーがまんしようねっていったのに、じぶんだけさるみたいにかかってさ♡」

「ひっ♡ やっ♡ いうなあ♡ いわないでそーりゆう♡ てーとくもきいちやだめえ♡」

「どーせすけべなじぶんみられてかんじてるんでしょ?♡ ほらっ♡ ひりゆうのだい

すきなちくびとくりとりすつぶしてあげるからいけっ♡ さっさといけっ♡ ていとくにしおかけながらいけっ♡」

「ひっ♡ いいっ!?!♡ だめえ♡ それいくっ♡ すぐいくっ♡ てーとくにみられながらいくうっ♡」

少し力を入れてやるだけで潮吹いちやう飛龍かわいい♡ あ、提督のおちんちんに

いっぱい潮かかっている♡ もうばつきばきでやばいよお♡ あんなの挿れられたら♡

ふっ♡ ふうっ♡ ほんとにしんじや——?♡

「——あ、あれ? 提督? 私持ち上げたらだめだよ? まだちよつとお仕事残ってる

んだよ? ね? だから待つて?♡ ひっ♡ て、ていとく?♡ まって♡ きいて♡

おろしちやだめだよ?♡ これ、くしざしになっちやう♡ そんなのやばい♡ やば

いって♡ ぜったいしぬ♡ ね?♡ さいしよはおくちでぬいてあげるから♡ おねがい♡ だからまつ——」

どちゆん、つてにぶいおどがしたきがして、いっしゆんなにがおこったのかわからなくて、でも、すぐ、わからされちやつた——

「——?♡ ??♡——」

——これ、ぜったいだめなやつだ♡

「つぎいいっ!?!♡ ひっ?♡ あえっ?♡ んぎゅっ♡ ふぎゅっ♡ おうっ♡ ててーとくっ♡ まっへ♡ これしぬ♡ しぬうっ♡ おなか♡ ぼこって♡ なかっ♡ ぐちや♡ ぐちやぐちやつてへえ♡ しきゅ♡ しきゅうつぶれる♡ ペしやんこになるう♡」

「そりりゆう……すごい……♡」

「あっ♡ ひっ♡ ひりゆ♡ ひりゆう♡ たすけ♡ たすけてえ♡ これっ♡ これだめ♡ だめなやつ♡ ほんとにだめえ♡ のうみそぶつとぶ♡ しぬっ♡ ころされるっ♡ てーとくのおちんちんに♡ ころされちゃううっ♡」

「ごめんねそりりゆう♡ おとなしくまってたらね♡ てーとくがかわいがってくれらって♡ だからね……はやくこわれて?♡」

「うっ♡ うそっ♡ うそっ♡ ひりゆう♡ たすけっ♡ ふぎっ♡ ひりゆ♡

まっへ♡ やめっ♡ やめへっ♡ そこ♡ そこおしりい♡ おしりのあなあ♡ よ  
わい♡ そこよわいのお♡ だめえ♡ さわっちやだめえっ♡♡「

「ほら♡ さっきのおかえし♡ いけっ♡ さっさといけっ♡」

「あぐっ♡ ふーっ♡ ふーっ♡ もっ♡ もうむり♡ とぶ♡ とんじや♡ うつき

♡ てーとく♡ はげしっ♡ ぴしゅとんはげしい♡ きつつ♡ おっ♡ いく♡

いっく♡ いっ—?!♡ て♡ てーとく♡ でてる♡ せーしでちやつてるう♡

んっぎ♡ ふっぎいっ?!♡ ですぎっ♡ だしすぎだよ♡ しきゆう♡ はれっ

するっ♡ もうはいらなっ—ふおおっ?!♡ ぬけたっ♡ おちんちんぬけちやつ

たあ♡「

「ふっ♡ ふっ♡ すご♡ すごいよそうりゆう♡ おなか♡ おなかちよつとぶくら

んじやつてる♡ —ねえそーりゆう♡」

「ひゅー♡ ひゅー♡ ほへ?♡」

「—おなか、おすね?♡」

「はっ?♡ えっ♡ なにし—つつ?!♡ ?♡?!?♡」

「あはっ♡ ふんすいみたいだよそうりゆう♡ ひどいかお♡ おんなのこがしちやだ

めなかおしてるよ♡ そーりゆう?♡ きこえて—つくおおっ?!♡♡ て♡ てー

とく♡ まって♡ まってまってまって♡ そっちちがう♡ おしり♡ おしりには

いって——おつぐううつ!?!♡♡」

それからはもうひたすら訳わかんなくて、ぐつちやぐちやで、気付いたら3人揃って  
気絶してました♡

大井たちに死ぬほど怒られちゃったけど、またしよーね♡ 提督♡ 飛龍♡

## 第5話 春風

「司令官様、お待ちしておりました」

この時を、どれほど待ちわびたことでしょう。

私たちが神風型の部屋を訪れてくださった司令官様を、私は三つ指をつき、決して粗相のないようお出迎え致します。

今日は私が秘書官を務めさせていただく日。お昼の業務も滞りなく終わり、執務室を後にして身を清め、全身に至らぬところがないか、それこそ神風お姉さまから、「ほんとは穴が開いちやうわよ」と言われるまで確認し、万事不備などございません。

ただ、その、松風からいただいた、いただいでしまった下着を身に着けるのには、大変な労を要しました……。

正直、今も少し後悔しております。司令官様は淫らな女性でも分け隔てなく愛されるお方ですが、私のような者には分不相応に思えてなりません。

どうか司令官様が、私の貧相な体には不釣り合いだと失望されないように――。



「司令官様、お望みとあらばいつ何時でもご奉仕致します。ですが、本日も大変蒸し暑い一日でした。ですので、先付に一献、いかかですか。冷酒をご用意しております。——はい、それでは、失礼致します——」

静かに笑みを向けてくださる司令官様に万感の想いを抱きながら、逸る気持ちをやめて抑え、私は良く冷やしておいたお酒を自分の口に注いでいきます。適量を含んだところで、司令官様のお顔に両手でそつと触れ、少しずつ少しずつ、口移しを楽しんでいただきます。

「んっ……ちゅ……えう……はあっ……♡」

司令官様にじつと見つめられる羞恥と快感に火照った身体を更に上気させながら、私はお止めがかかるまで、ゆっくりと時間をかけてお注ぎします。

お酒にそれほど強くない私は、口内に含む酒気と、触れるたびにとろけるような痺れを伴う口づけ、司令官様の舌から伝わる熱と快楽に酔い痴れていきます。

「んふ……♡ はあ……♡ ちゅ……♡ し、しれいかんさま、申し訳ありません。春風も少し……酔ってしまつたようです……♡」

私が奉仕する側にも関わらずこうして乱れることに僅かな抵抗を感じはすれど、それ

を遙かに上回る快感の波と充足感が私の思考を鈍らせていくのです。

この泊地にて百を優に超える艦娘を従え、慕われ、愛してくださる司令官様。当然私も、皆さまと同じくこのお方に想いを寄せ、思いの丈に身を焦がし、ただの一言でもかけていただければ、生娘のように喜び満たされてしまう。

なんと軽い女でしょう。ですが、私はそれで一向に構いません。神風型という、どうしても性能面で見劣ってしまう私たち。にも関わらず、なんの疑問も、疑念も抱かず差し伸べてくださったこのお方の手に、どれほど救われたことでしょう。このお方だからこそ、私はこの生の全てを司令官様の為に使い、尽くしていくと心に決めたのですから。「司令官様、楽しんでいただけましたか？　そうですね、よかったです……。次はいかがいたしましょうか。春風はどんなご命令も——え？　鏡を見ながら服を？　わ……わかりました……」

この部屋にある姿見は、私たちが普段つかっているもの。当然、私の全身を難なく映せる大きさです。司令官様に見られるだけでも羞恥で頭がふらついてしまうのに、自分も見るだなんて……。それに、今日の下着は……。

「で、では、失礼いたします……」

言いつけ通りに、私はゆっくりと着物を脱いでいきます。鏡に映る私の顔は羞恥で赤く染まり、手も脚も震えさせながら、刺すような刺激と猛烈な熱が私の下腹部を疼かせ

ていきます。

薄暗い、静かな部屋に響くのは衣擦れの音と、私の荒い吐息だけ。

「し、司令官様、お許してください……。こ、こんなお見苦しい姿で……私は……」

ついに下着以外何も身を隠す物はなくなり、私は無意識に胸と秘所を隠します。ですが、司令官様はそれを許してはくありませんでした。

隠すな。

それが、司令官様のご命令。当然私には、逆らうなどという選択肢はありません。

「は、はい……。ふ……。う……」

布面積が極端に少なく、本当に必要な最小限にしか覆ってくれない。しかも生地自体が非常に薄く、隠れるべき部分が透けて見えてしまっている、レースをあしらった黒のブラとショーツ。雄の欲情を煽るためだけにあるような自分の姿。さらに、それを愛しい殿方に余すことなく、ひたすら無言で見つめられ、私は氣をやってしまうのではないかと思うほどに、余裕など欠片も残してはいませんでした。

「はっ……。ふ……。んう……。♡」

そんな状況にも関わらず、いえ、そんな状況だからこそ。私の淫らな身体は司令官様の愛撫のような視線に従順に反応し、乳首を痛いほど尖らせて布越しに形を主張し、薄いショーツでは到底吸いきれない愛液をしとどに溢れさせ、太ももにまで垂らす有様で

した。

そんな淫猥極まりない自分の姿を鏡で認めた瞬間、強烈な快感が、私の子宮から全身を貫きました。

「あつ……やつ♡ そんな、わたくし——いくつ♡ いつ——くうっ♡」

不意に襲った甘美極まりない刺激に耐えられるはずもなく、つま先立ちの脚は自然と大きく開き、前に突き出して快感を逃がそうとカクカク♡ と腰を揺する私。司令官様に教え込まされた動作を、私の身体は完全に覚え込んでいます。

「はっ♡ ふっ♡ ふっ♡ し、しれいかんさまぁ♡ もうしわけございません♡  
きよかもいただかずに♡ か、かっつに♡ たっつてしまいました……♡」

謝りながら、相変わらず腰をへこへこ♡ と情けなく動かす私に気を昂らせてくださったのか、司令官様はそのまま腰を落とすよう命じられました。

大きく股を開き、腰を深く落とす——蹲踞の姿勢となった私の目の前に、司令官様の怒張がぶるん♡ と大きく波打って突き出されます。

「ああつ、司令官様♡ 司令官様のおちんちん♡ はい♡ 春風、精一杯ご奉仕させていたできます♡」

完全に勃起した司令官様のおちんちんからは止めどなく先走り汁が垂れ、私を即座に雌に墮とすには十分すぎる性臭を漂わせています。

私は欠片も躊躇することなく、私にとっては巨大とも言える亀頭を頬張り、無理矢理喉奥まで咥え込みます。

「ふうっ ♡ んぐ…… ♡ ふふう ♡ ぐっ ♡ ぶえ ♡ おっっ ♡ つ ♡ つ ♡ ぐびゅっ ♡ ごきゅ」

えずくのを気にも留めず、私は司令官様に快楽を届ける道具として、口と頬をすぼめ、舌でねぶりまわし、喉でしごき、ただただ頭を振り続けます。

「じゅぶ ♡ ごちゅ ♡ ぐぶっ ♡ じゅるるっ ♡ ごきゅ ♡ おえっ ♡ んつぶ ♡ はぶ ♡ んふうっ ♡ つぶはあっ ♡ し、しれいかんさま？ ♡ けぶっ ♡ ふえらちおはもうよろしいのですか？！」

はしたなくげつぶをしてしまいました、そんなことよりも口淫の中断を命じられたことの方が気になります。気持ちよくなかったのでしょうか……。それとも、あつ…… ♡ そうなのですね、司令官様 ♡ 私のお口を使ってご準備を ♡

「は、はい ♡ 春風のおまんこは ♡ いつでも準備ができております ♡ どうぞお好きなようにおつか、い——っ？？」

蹲踞したままさらに腰を浮かせて、挿れていただきやすいようにした途端、司令官様は私の腰を力強くお掴みになり、大変立派なおちんちんが私を貫いてくださいました。

「うっ ♡ かはっ ♡ ひっ ♡ ひれいかんさま ♡ そんなきゆうに ♡ い、いれられて

は♡ はるかぜ♡ すぐにたっしてしまいます♡ そ、そんな♡ がまんしろだなんて♡  
 ♡ むり♡ むりですう♡ あっやっ♡ ぬいちゃやだ♡ ぬかないで♡ わかりました♡ がまん♡ がまんします♡ だから♡ だからおちんちんぬかないでください♡ おねがいます♡」

酷いです司令官様♡ 私がすぐに達してしまふのをご存知なのに、いじわるばかり仰られます♡ でも、虐められると余計に感じてしまふので、やっぱり私は司令官様に一生逆らえません♡

だから、何を言われても何をされても、春風は従うしかないんです♡

「し、しれいかんさま♡ まだ♡ まだですかあ♡ はるかぜつらい♡ つらいのおいきたい♡ いっぱいしれいかんさまにいかせてほしい♡ やっ♡ かがみ♡ はるかぜのえつちなすがた♡ ぜんぶうつてます♡ ひどい♡ ひどいかお♡ かな♡ こんなのつてえ♡ あう♡ ごめんなさい♡ しれいかんさま♡ あまいき♡ あまいきしてます♡ しちやってます♡」

鏡に映る私の、あまりに卑猥な姿に堪えることができず、私は司令官様の命令を反故にしてしまいました。こうなつてはもう、どれだけ許しを請うたとしても、決して聞き届けてはくさいませぬ♡ 神風お姉さま達が来るまでの間、ひたすら司令官様に犯され続けませぬ♡

「ふぎっ♡ うれしいかんさま♡ おゆるしてください♡ はるかぜ♡ もうずっといつてるんです♡ ごめんなさい♡ つらい♡ きつい♡ つらい♡ きつつい♡ んお♡ すご♡ まだはげしく♡ つよい♡ つよいよお♡ しきゆう♡ なかまでおかされちゃう♡ あ♡ だめ♡ しきゆうのおくちあけちやだめ♡ だっ——めええっ!?!」

完全に降りきった子宮がだらしなく口を開き、司令官様の大きな亀頭を啜え込んでしまいました♡ ああ、また子宮が引き摺り出されるまで犯されてしまいます♡ 春風は今日、完全に壊れてしまうかもしれませぬ♡

「あぎゅっ♡ おうっ♡ ほおっ♡ し、うれしいかんさまあ♡ だして♡ このまま♡ なかに♡ おねがいします♡ おじひを♡ うれしいかんさまのものだと♡ あかしくください♡ おねがい♡ いまだけ♡ いまだけでいいから♡ はるかぜを♡ はるかぜだけをみてください♡ ああっ♡ うれしいかんさまあ♡ いく♡ いくいく♡ いく♡ しいいかんさまといっくうっ♡♡」

ああ、春風は幸せです。こんなに見つめられながら愛していただけるなんて。優しい司令官様。どうかお気を病まれませんように。春風はいつでも、いつまでも、あなたのそばに——。